

こちらを元気づけるものであるということに、べつに变りはないのよ。」
彼女——私はいつも、ヒロシマの運命のことで泣いたわ。いつも。

爆撃のあとで撮られたヒロシマの写真に対する、すなわち、世界中の他の沙漠と照合される点のない《新しい沙漠》に対する、パノラマ撮影。

彼——いや、ちがう。

何について、きみは泣いたというのだろうか？

平和広場のつぎつぎに現れる光景は、きらきら輝く太陽の下で空虚であり、その太陽は原爆の太陽を思いださせ、眼を眩ませる感じた。そして、その空虚の上にもう一度男の声。

誰かが空虚な広場の上を、さ迷っている。(午後一時頃)

一九四五年八月六日のちに撮影されたニュース映画。

蟻や虫が、土から出てくる。

肩と肩が交錯する愛の場面が、続いている。女性の声がまたひびき始めるが、それはまるで狂ったようである。それと同時に、ニュース映画のさまざまな映像が流れて

行くが、それらもまた、まるで狂ったようである。

彼女——私はニュース映画を見たの。

二日目に、と「歴史」は伝えているのよ、私はでたらめの話を作ったんじゃないの、二日目から、いくつかの種類のまさしく動物であるものが、土と灰の深いところからまた現れて来たの。

犬が何匹か撮影されたわ。

永久に。

私はそれらを見たわ。

私はニュース映画を見たの。

私はそれらを見たのよ。

最初の日の。

二日目の。

三日目の。

彼(彼女の言葉をさえぎって)——きみは何も見なかった。何も。

肢を切断された犬。

ひとびと、子供たち。

いろいろな傷口。

ひどい火傷をして、わめいている子供たち。

彼女——……二週間目のも、また。

ヒロシマは、花々でおおわれたの。いたるところ、矢車菊とグラジオラス、そして、昼顔とヤブカンゾウばかりだったのよ、そのときまで花々にそんなものがあるとは知られていなかった生命の異常な逞しさで、灰の中から生き返ってきたのは。

*この文章は、ハーンシーのヒロシマに関する感嘆すべきルポルターージュにおける一つの文章のほとんど原文通りである。私がしたことは、その言葉を、苦難の子供たちの画面にかぶせたことだけである。

彼女——私は何も、作り話をしなかったわ。

彼——きみはすべて、作り話をしたのさ。

彼女——何も。

愛の中には、こんな幻が、決して忘れないでいることができるというそんな幻がある、あるのと同じように、私はヒロシマを前にして、決して忘れないだろうという幻をもったのよ。愛の中における場合と同じように。

外科医のピンセットが、一つの眼球に近づくと、それを摘出しようとして。
ニュース映画が続く。

彼女——私はまた命拾いをしたひとびとや、ヒロシマの女たちのおなかの中にあつたものを見たわ。

綺麗な子供が、観客の方を向く。そのとき、観客は、その子供が片眼であるのを見る。

ひどい火傷をした若い娘が、鏡に映して自分を眺めている。

また別な若い娘は、盲目になっており、よじれた手でティターを弾いている。

ある女は、死んで行く子供たちの傍で祈っている。

ある男は、数年も前から、もはや眠れないで死にそうになっている。(二週間に一度、彼のところにその子供たちが連れてこられる。)